

# Salut

サリュ——フランス語で「救い」の意  
2004.AUTUMN

應典院寺町倶楽部のニューズレター「サリュ」通巻43号2004年秋号

# 2004 AUTUMN

大事なのは、当面の症状を何とかすることではない、症状に現れている自分の生の問題に気づくことなんだ。人間関係がうまくいかないからと言って、人との接し方を仏教に学ぶのではなく、自分にとって他者とは何か、人間関係・社会という現象をどう理解し、扱うべきかを考えるのが本当だろう。それをテーマに「縁起」を学んだら、これは深い。生き方が変化する可能性がある。

南直哉(問いから始まる仏教)から

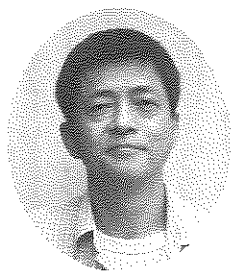
# 2004 AUTUMN



少子高齢化社会を迎え、「弱さ」に目を向ける生き方が求められています。同じ苦しみや境遇の癒しあいではなく、「弱さ」を力にしてつながり、受容する社会はどうすれば創造できるのでしょうか？

「どもり」という「弱さ」を社会にひらき、同じ悩みを持つ人の支えとなる活動を40年間続けてこられた伊藤伸二さんにお話を伺いました。

## 「弱さ」を社会にひらく。 セルフヘルプとわたし。



日本吃音臨床研究会代表 伊藤伸二さん

1944年、奈良県生まれ。明治大学文学部・政治経済学部卒業。大阪教育大学特殊教育特別専攻科修了。現在伊藤伸二ことばの相談室主宰。日本吃音臨床研究会会長。大阪教育大学非常勤講師。言語聴覚士養成専門学校3校で吃音の講義を担当。国際吃音者連盟の顧問理事。セルフヘルプグループ、論理療法、交流分析、アサーティブトレーニングなどを活用し、吃音と上手につき合うことを探る。吃音ワークショップ、吃音親子サマーキャンプ、臨床家のための吃音講習会などを開催。應典院寺町倶楽部の元運営委員で、竹内敏晴さんの「からだことばのレッスン」大阪教室を應典院で毎月運営している。

### 互いを支えあうセルフヘルプ

ぼくは子どもの頃から、どもりで悩み、孤独に生きてきました。それが、大学の時に初めて同じようにどもりに悩んできた人たちと出会い、自分の話を聞いてくれて、そのぬくもりと安らぎを感じる体験をしました。その感覚を味わってまた一人ぼっちになるのは耐えられないなあと感じて、どもる人のセルフヘルプグループ(※)を立ち上げたのが1965年です。このグループでは、ただ同じ境遇の人が集まり支えあうだけではなく、社会を意識した活動をしたかった。当時

## 犀の角のように ただ独り歩め

今のひとびとは  
自分の利益のために交わりを結び、  
また他人に奉仕する。  
今日、利益をめざさない友は、  
得がたい。  
自分の利益のみを知る人間は、  
きたならない。  
犀の角のようにただ独り歩め。

「スッタニパータ〜ブッダのことば」

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター

# サリュ

Vol.43

|                                                         |    |
|---------------------------------------------------------|----|
| Top Interview 「弱さを社会にひらく」<br>セルフヘルプとわたし。……………           | 1  |
| 寺子屋トーク「がんばれ仏教」後日談<br>仏教の枠を飛び出そう！……………                   | 4  |
| 第42回寺子屋トーク<br>「がんばれ仏教」レポート……………                         | 9  |
| アーツで若者の「雇用」を育てる。<br>OSAKAアート「ミニ」ティ……………                 | 10 |
| プロジェクトとは何か……………                                         | 16 |
| Salut Gallery<br>應典院に集うアーティストたち……………                    | 18 |
| SPACE-D RAINA 2004<br>SPACE-D RAINA 2004から……………         | 23 |
| 新しい演劇の「ミニ」ティを創造する。<br>High school Play Festival 報告…………… | 24 |
| 「人生の完成期」と向き合って生きる<br>「私と大連寺」エンディングを考える市民の会……………         | 28 |
| 山光彦主幹から……………                                            | 28 |

はセルフヘルプという言葉は日本に紹介されていませんでした。患者会や障害者団体はありましたが、治す、改善することを目的としていました。セルフヘルプというのは同じ境遇の者同士が支えあって、自分の人生を生きようということですから、治らないとか治せない、つまり簡単には解決しない、というのが前提なんです。

## 配慮という暴力

ぼくは、どもりの苦しみを同じように体験した人と出会うことで、ほっとしたり、力がわいてきたりという経験をしました。だから、子どもの頃に「ひとりぼっちじゃない」という経験をしてほしいと、15年前に始めたのが、吃音親子サマーキャンプ※2です。

そこで15年、どもりの親に接していますが、残念ながら大人の受け止め方に大きな変わりはありません。「うちの子はかわいそう、なんとかして治してあげたい」「どもりを意識せず、にそつとしておいたほうがよい」という反応です。それは親子を取り囲む社会全体、教師にも強くインプットされていて、子どもの欠点や弱さというものを指摘したらかわいそうだという、配慮が横行しています。ぼくは配慮の暴力というのがあると思います。治ることを期待してどもりについて話題にしないという、そんな大人の意識を変へるために本を書いたり、

出ている。弱さはしなやかです。これまでは「どもつてかわいそう」と弱さの中の弱さを押し付けられたりしました。そうならないために、きちんと自分の問題を見つめることは大切なんです。

例えば「どもつて恥ずかしい」と思ったのは、一体なぜかと自問してみる。それは周りの人から、どもるので、こんなことしなくていいと配慮されたり、弱い立場を押し付けられてきたことと関係があるのかもしれない。烙印を押されてそこに安住をさせられてきた。弱さを演じてきたこともあるでしょうね。それを明らかにするのはつらい仕事だけれども、向き合わないといけない。一人では難しいからセルフヘルプグループがあるんです。

しんどいけれど一緒に向き合おう。それをしないとただ「そうだね、苦しいね、よくわかるよ」という表面だけの共感に終わってしまう。それだと本当の苦しさは超えられない。

## 失敗から学び、悩むことを恐れない

今の子は、悩み方が下手になっている。悩み方のノウハウを教えるというのはすごく変だけれど、「お前の悩み方、変じゃないの」ということを言う大人がいていいんじゃないですかね。悩むチャンスを大人が奪っている。それも配慮なんですよ。失敗したらこの子はだめだと、失敗させないようにしな

発言したりしてきていますが、インターネットの時代で簡単に情報発信ができるために、状況は40年前よりさらに悪くなっています。「どもり治療の秘策」みたいな劣悪な情報が増えています。親は治るというメッセージや情報にすがりつきたいわけですから、飛びつきますよ。

治るとはどういうことか。ぼくもはつきりわかりません。一般的にいうと、空気を吸うように何の躊躇もなく話せるというのが治ることでしょう。また、そのままで自信を持って生きるというのも治ることだといえる。今、ぼくは何も悩んでないし、どもりで困ることは100%ない。だから、「伊藤さんは、治っているんじゃないか」と言われたらそうだけれども、それを治るといつてしまってもいいのかわからない。どもりながら「俺は平気だよ」というほうがいい。だから治るとい言葉はあえて使わないで、治らないけれども自分らしく生きること、できるんだよというメッセージを投げかけたい。治る、治らないの二元論的な世界から違う見方を提示したのが、セルフヘルプの活動といえるのかもしれない。

## 弱さに向き合うこと

だから治そうということではなくて、どもりという弱さは弱さのままでもいいときちゃんと受け止められたら、社会にもひとつの力になる。弱さの持つ強さを自覚できたら、社会に

いと、という。そうでは、むしろ失敗したほうがいい、悩んだほうがいいわけですよ。悩むことのなかに工夫があり、発見があり、気づきがあるのに、悩むことを恐れてしまう。これからの自分とか、なぜ生きているのか、そういう問いを発見するの、若い人がもっと創造的に悩むことじゃないかと思っています。

そのために、弱さに向き合うチャンスや場を、大人が提供していかないといけないですね。向き合うということは苦しいけれども喜びもあり、発見もある。サマーキャンプが成功しているのは、ぼくらがどもりながらも楽しく過ごしている、その姿を子どもたちに見せているからです。大人がモデルとなるような生き方をし、人生の喜び、楽しさを提示することです。じかにふれあえて向き合う経験をさせる。そういう場を与えることが大人の役割じゃないかと思っています。

### ※1セルフヘルプグループ

「共通の体験を通じて活動し、自分自身の生き方を見出していくグループ。そこでは同じような困難を持つ人同士が対等な関係の中で体験を語り、情報を交換し合い、感情を表現する。仲間同士が援助の与え手となり、受け手となる。精神障害をもつ人たちのグループ、不登校、閉じこもりの状況にある人たちのグループ、難病などの病気の人たちのグループなどさまざまなグループがある。

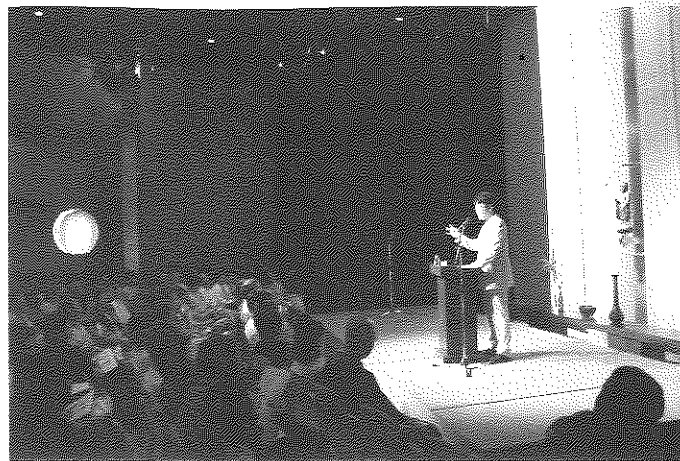
### ※2吃音親子サマーキャンプ

毎年8月の3日間、同じような体験をしている子どもと親が、これまで話題にしてこなかったどもりについて語りあい、演出家 竹内敏晴氏の書き下ろし脚本による演劇に取り組み、自然体験を通じて交流をする。日本吃音臨床研究会主催。2003年度は140名を超える参加者が全国から集った。

# 仏教の枠を飛び出そう！

〜こころと届きつながらる仏教へ

## 寺子屋トーク「がんばれ仏教！」後日談



「お寺は観光名所か葬祭センター」と思っている人は、ひょっとして多いのではないのでしょうか？ もちろん、先祖を供養する仏事も、歴史ある伽藍を守ることもお寺の重要な役割ですが、それが私たち人生に寄り添う仏教の姿かと問われれば、とたんに答えに窮してしまいそうです。

では、私たちの生き方や暮らしに根ざした仏教とはどのようなものなのでしょう？

このたび、寺子屋トークの参加者として会場に立ち合われた若者二人が今に生きる仏教について率直に語り合いました。

### 専門家らしくない専門家

——上田さんには、97年の第3回の寺子屋トーク以来、2回目の出講となりました。NHKブックスの『がんばれ仏教！』の刊行を記念しての開催です。

Maiko ●私は、第3部の対談で上田さんと秋田さんの聞き手役でした。仏教とはまったく関わりのない立場であったので、率直にお聞きすることができました。知らない者の強さで、私の世代を代表して言えたと思っています。

でも、お話を聞けば聞くほど上田さんは学者っぽくないなあという印象を持ちました。学者さんには少し先入観を持っていましたが、宗教学者の上田さんが、仏教を正面から批判したり応援したり、そんなに入れ込んでいいのかなと思ってしまいました(笑)。上田さんを通して、学者さんもある意味、僧侶と似ているんだなと感じました。

——どういふことですか？

Maiko ●お釈迦さんが昔にお話されたこと、経典に書かれている難しいことは私たちにはよく分かりません。それを分かりやすく伝えてくれるのがお坊さんの仕事。その時代の言葉で説明しながら、いろんな世代の人に伝える力が必要です。言葉だけでなく、僧侶の動きとか活動を通して、私たちに伝わってへるものもあります。

学者も論文を書いていればいいのではなくて、社会の中に

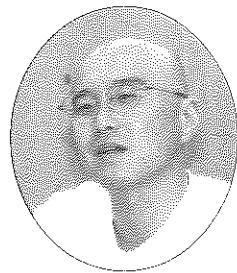
活かすために多くの人がかりやすく伝えなければならぬのですよね。『がんばれ仏教！』の中で、傑出した僧侶をクローズアップしている上田さん自身も、実は学者の世界では傑出している、ユニークな存在のように思いました(笑)。

——大崎さんは、僧侶としてホスピスやスピリチュアルケアで活躍されていますが、聞いていていかがでしたか？

大崎 ●私は最初はすかいに構えて見ていたんです。知らない人に「がんばれ」と言われるのはいやだったんです。でも本の中に取上げた僧侶をたたく取材しているだけじゃなく、上田さん自身が活動にふれて心を揺さぶられ涙もこぼしたし、自分の生き方も変わり、本の趣旨も変更したと聞いて、私の気持ちもすくなく納得できました。

また、僧侶仲間だけでなく、仏教を客観的に見る人たちの協働もこれからは大切だと思いました。もしかしたら仏教界も閉鎖的な部分があるかもしれません。仲間と違う動きがあると、それをすぐ批判したりするからです。社会的な活動が目立ってしまうのも、僧侶の世界の狭さに起因しているのではないかなと思います。そんなとき、つづれそうになる。身内とは違っても十分社会に根ざした意見を聞くこと。そうなんや、俺は俺でええねん」と励みになります。また「これはやらないとあかん」と奮起もさせられました。「がんばる内容は自分自身で考えよ、見つけよ」ということなんだなと。

それともついつい、学者さんと同じだと思いましたが、専門



大崎信久さん

浄土宗玉手山安福寺副住職。平成12年6月から「病院や福祉施設・お宅など、僧侶が出前をいたします」と銘打ち、浄土真宗僧侶と2人で『お寺の出前の会』を始める。ハーモニカや手製紙芝居を用いた仏教相談をはじめ、法話や語り合いの場づくりなど、仏教を通じた人と人とのふれあいを心がけた活動を続けている。目下、医学と福祉と宗教との連携を目指してがんばっている。

家になればなるほど、専門家と悟りせないような身のこなし方も大事だなと思いました。

## お寺には無限の可能性が？

——具体的にいうと？

大崎●あえて専門用語を使って話すことはしない。でもいうべきことがちゃんと伝わる。そういう意味でいうと、上田さんはご自分の言葉で熱く語っていたのでよかった。身軽なスタンスで共感できますよね。

私たちも法話会をしますけど、お寺でするとやっぱり難しい言葉になる。どついても関係が窮屈になるんですね。でも、子ども会でお話すると言葉が変わる。子どもに合わせた言葉に自然と変わるんです。

最初に應典院を訪れたときに、「ここは何？」と驚きました。神聖な雰囲気はあるけれど、アクティブな動きがあり、誰かが話しかけてくれる。そこで何かに出会えるんですね。ほかの多くのお寺も、そこで「お坊さんからお話を聞けた」とか、「おもしろい人に出会った」とか、もっと人がかかわるような、プラスアルファがあればいいと思います。お寺は聞き方次第のような気がします。いろんな可能性を秘めた場所ですよ。おもしろそうです。私、お坊さんになってもいいな(笑)。

## 場所も人も変化していく

——仏教というと、すぐ宗派とか教団という組織で語られることが多かったんですが、NPOの時代はやはり個々の寺がもっと活力を起こしていいほしい。大組織では望めない、もっと創造的なものが生まれるんじゃないでしょうか。

大崎●住まいをお寺ではなく、マンションに移ると決心したとき、ある檀家さんに「寺におらん坊さんはたの人や」と言われたことがあります。それほど、お寺＝坊さんという定式は強い。でも、仏教はそこだけにあるわけではないですよ。

現在はマンションのお寺に人が集まる、というより、私がどんどん出て行くようにしています。お寺は動かないけれど、衣を着た僧侶はどこにでも向かっている。場というのは、固定された場所だけでなく、そこで仏教的な何かが立ち上がる

Maiko●それって相手が子どもだからですか。

大崎●子どもだけじゃなくて、若者でもそうです。お寺の慣わしを知らない人たちと接すると、全然関係が変わってきますね。ごまかせないというか、僧侶自身の品性というか熱意のよいなものが、問われてくるような感覚があります。

——大崎さんが実践している「お寺の出前」も、そういう外とのつながりを求めているものなんですよ。

大崎●そうですね。「お寺の出前」の活動を始めた直接の背景は、地域の住民人口が急速に増加して、逆にお寺の存在を知らない人が増えたことです。お寺の音が外に届かないのと同時に、地域の声も聞こえてこないことに危機感がありました。

お寺を知ってもらうために「とりあえず外に出よう」と始めたのが「お寺の出前」です。身軽にこの活動を続けるためにしばらく、お寺を離れて今はマンション住まいをしています。

Maiko●へえ、マンションでお寺なんですか。私のお寺のイメージって、立派な伽藍と大勢の僧侶という感じしかなかったんですが、それってすごいですね。やっぱり観光寺院、だけじゃなかったんですね(笑)。

——お坊さんの定番のイメージもありますよね。

Maiko●そうですね。ですからお坊さんも、ものめずらしさだけでなく舞妓さんと変わりますね(笑)。今までは観光寺院というそれなりの楽しみがありましたけど、名所としてすばらしいだけでは物足りない(笑)よね。

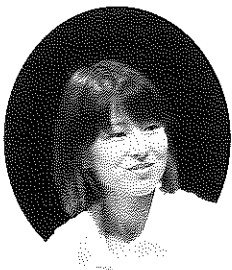
これはおもしろいと思う。そんな場があちこちにあつたら、おもしろいですね。

Maiko●場所も変化していけばいいように、お坊さんのスタイルももっと多様であっていいのではないのでしょうか。

お葬式とか法事だけ専従ではなくて、たとえば教育や福祉や芸術を通して、もっと幅広い活動をしていけばいい。何か活動を始めるのに、すでにお坊さんはすごく有利な立場にありますよね。

——なぜそう思うんですか。

Maiko●私が起業する時に、一番苦労したのは、「社会的な信用」をどう得るか、ということでした。肩書きや経歴をどんなに飾っても、そうそう人は簡単に相手を信頼してくれません。でもお坊さんは、周りの人の見る目に信頼が前提にありますよね。歴史的な信用というか、そのお坊さんがどんな実績



Maikoさん

時代を先駆け大卒フリーターを経験後、大阪市中小企業支援センター主催の勉強会への参加をきっかけに、事業運営に関わる。関西20代起業家の会2代目代表。通訳・翻訳家として独立し、講師・司会者としても活動を続けながら、新たなフィールドを求めてアロマセラピーなどを勉強中。仏壇と神棚の区別がやっとな程度だったが、これを機に仏教に関心を持つ。



があるかではなく、お坊さんである、というだけで信頼を得ることができるといふのはたいへんなことだと思います。

それと、さっき場所の話が出ましたが、やはりお寺という箱もの、しかもいろんな人が出入りするところを前提にした場所があることもすごいことです。あとはお坊さんの創造力次第ではないかなあ。こうしようという自分の使命感さえ

あれば、それを表現できる場所として可能性は高い、と思います。

大崎●それから施設的な意味だけでなく、お寺には環境的な価値もありますね。鎮守の杜じゃないけれど、お寺の境内地が都会の自然を守っているということもいえる。それって公園の緑とはまた違った、よりごろごろとしての自然環境ではないでしょうか。

私も経験があるのですが、環境の活動などはお寺だけが奮起しても限界があります。地域の住民や行政とも力を合わせて、いっしょに何事かを成し遂げていくことです。それには、まずもって僧侶は仏教以外にももっと勉強し、関わっていないといけないと思います。

Maiko●今回の「がんばれ仏教！」は、私の考えていた仏教のイベントとは全然違うもので、すごくおもしろかったです。應典院は仏教でないような顔をして、アートやNPOを通して、本当は仏教を伝えているのかな、とも今回感じました。

いまの若い人はけっして仏教に興味がないわけではありません。今度、應典院と大蓮寺で「小僧インターン」を始めるそうですけど、そういう若い人が気軽に勉強や体験できる場があれば、もっと仏教が元気になるな、と思いました。

大崎●ホスピスの活動を通して、いろんなお医者さんと出会いましたが、医師の中にも仏教や僧侶とかかわりを持つとする人たちがいます。これからは医療だけでは限界があるから積極的に仏教や僧侶から学びとる人もいます。仏教も医学も、両方とも自分たちの枠組みから飛び出そうとしている機運を感じます。できればその力どつしが数珠つなぎになって、全体を引っ張りあげることができたらすばらしい。

そして声なき声を誰がどのように引き出して、社会のなかで実現していくのか、真剣に考える時を迎えているのではないのでしょうか。

——今日はありがとうございました。

## 第42回寺子屋トーク 「がんばれ仏教！～お寺ルネサンスの時代」レポート

第42回寺子屋トーク「がんばれ仏教！～お寺ルネサンスの時代」は、宗教人類学者の上田紀行さんをゲストにお迎えし、同名新著（NHKブックス）の刊行を記念して、7月10日に開催されました。上田さんは應典院再建の97年、第3回寺子屋トーク以来、2度目のご登場です。会場には、仏教に関心の高い学生から中高年まで幅広い年齢層の参加者120名が詰めかけました。

第1部は上田さんのご講演で、しばしば伝統教団の末期症状を指摘しながら「豊かになったが生きる意味をどう見つけ出したらいいのか」人々が悩み、「その時こそ仏教の出番」であるが、今の日本の仏教が「本当に苦と向き合っているのか」と主張されました。右肩上がりの経済成長が破綻したいま、80年代には先端的な若者のみが感じていた不安感、孤独感、空虚感などが中高年まで及んでおり、それを救うことのできるのが仏教だと、熱く語りました。

ただ教えを言葉のみで説く仏教（縁起を説く仏教）から、僧侶が人々の悩みに向き合い実践する仏教（縁起を生きる仏教）への転換を提案し、應典院の秋田主幹をはじめ、神宮寺の高橋卓志さん、法然院の梶田真章さんから魅力ある僧侶の活動も紹介されました。

第2部は秋田主幹が「お寺でアートをやる本当の理由」と題し、應典院におけるアートの取り組みについて報告しました。

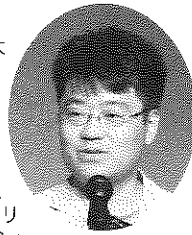
第3部は、秋田主幹と前出のMaikoさんを加え、應典院の活動を切り出しに、これからの仏教と社会の関係について語り合いました。秋田主幹は「仏や経典が絶対的に尊いのではなく、それに願いを傾けるあなた自身が尊い、というのが仏教の考え方。まさに偉大なる相対主義とっていい」と述べ、一神教とは違う仏教の可能性を説きました。

上田さんも「應典院に出会って、これまでの寺についての概念が切り替わり、「全国7万あるお寺が、私たちに向き合う寺になったら素晴らしい」と述べました。

お寺は歴史的、文化的、社会的にすばらしい資源を秘めた場所。多くの宝物がありながら、それを十分に活かしきっていない。これからの「お寺の構造改革」を投げかけた寺子屋トークとなりました。

### 上田紀行さん

1958年東京生まれ。東京大学大学院人類学専攻博士課程終了。愛媛大学助教授を経て、96年4月より東京工業大学大学院助教授（社会理工学研究科価値システム専攻）。専攻文化人類学。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、著書において「癒し」の観点を最も早くから提示し、現代社会の諸問題にも積極的に発言する。





大阪の都心に、劇場型寺院・應典院が再建されて7年が経った。現在年間40本の舞台公演をこなし、年間3万人以上の若者が通うこの寺は、関西の若いアーティストには少しは知られた存在となった。ホールマネジメントなんてまるで素人の私たちが開かれたお寺づくりを目指し、再建に取り組み始めたのは、93年のこと。たまたま檀家さんのいない寺であったから、新たに会員制を設け、宗派に関係なく、寺のミッションに共感する人たちに参加を呼びかけた。葬式をしない代わりに、應典院が掲げたのは、非営利の市民活動と芸術文化活動を支援するNPO。歴史と伝統のお寺を、NPOやアーティストと協働して、新たに地域に開いていく試みでもあった。

#### 應典院に育成の拠点

現在、ほぼ週末が舞台公演に活用されているが、発表だけの場ではなく、育成の拠点としての役割を年々に蓄えていった。例えば、旗揚げ5年以内の若い劇団をサポートする「Space x Drama」や高校生たちの演劇甲子園「ハイスクール・プレイ・フェスティバル」(以下HPF)の開催、それに併せて技術スタッフや劇団プロデューサーの研究など、舞台活動に従事する人材養成にも取り組んできた。また毎夜のように劇団の稽古が続くが、その無償提供も、拠点としての大事な役割である。

應典院のモデルとなっているのは、70年代の英国のコミュニティシアターの存在だ。演劇のアウトリーチ、教育プログラム、市民参加型劇場といった刺激的な実践は、なぜ寺で芸術なのか、という私たちの存在の問いに対し、数々の示唆を与えてくれた。また、芸術が一部の愛好家のためでなく、地域や人材の開発にとって極めて大きな創造資本であるという認識は、それまでの劇場の役割を大きく転換するものでもあった。

かつて寺は、コミュニティの中心であった。教育や福祉、芸術文化などにわたり、日常の生活や暮らしに深く根づいた、寺院文化の伝統があった。それはより広い意味で、地域主体の学びや育ちを支え

## アーツで若者の「雇用」を育てる。 OSAKAアートコミュニティ プロジェクトとは何か。

應典院寺町倶楽部事務局長 秋田光彦

昨年秋、大阪府・大阪商工会議所による「大阪・まちの賑わいづくり事業コンペ」※に、應典院寺町倶楽部の事業案が選定された。停滞する地域経済の活性剤として期待されるコミュニティビジネスだが、それと「若者の雇用開発」を結びつけるユニークなアートプロジェクトでもある。

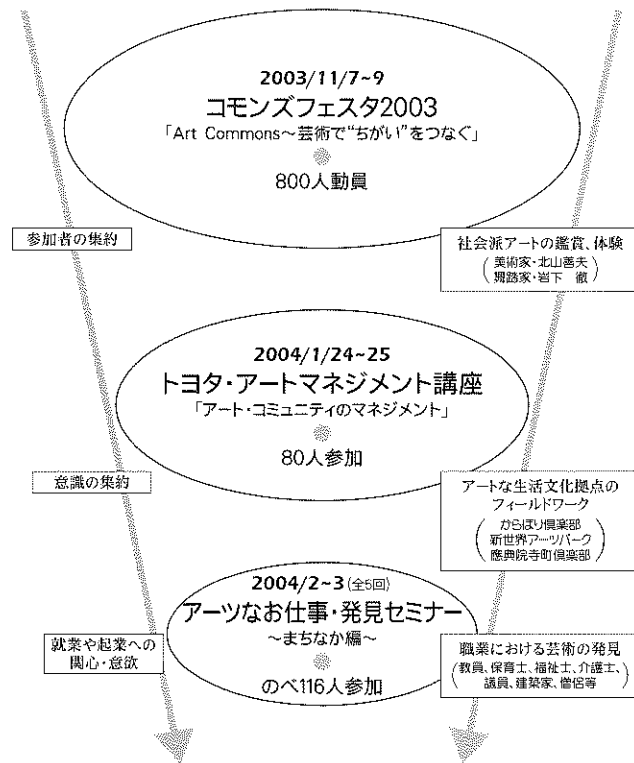
人材育成の拠点・應典院からアーツに架橋しながら、若者たちにとっての「働くこと」の価値創造について考える。



## OSAKAアートコミュニティプロジェクトとは何か

「やりたいことが分からない」「前々から、就職以前に自分の中の『働くこと』の価値や意味づけが不十分なことだ。」「やむを得ず、就労活動をする大勢の若者たちにとっても、芸術と『働くこと』は完全に別物であって、そこで育まれた能力を仕事に活かすような場面はないに等しい。日常の仕事から分断されたアーツはますます孤立化して、やがて、芸術かさもなければ就職か、という将来性の乏しい人生の択一が求められる。」

### OSAKAアートコミュニティプロジェクト



めることができれば、芸術の諸能力を活かしながら働く場所や、自ら起業するチャンスはたくさんある。

いま、日本の若年層の失業問題が深刻化しているが、それは制度や条件を整えればすぐさま解決できるものではない。一番の問題は、彼ら彼女らが「やりたいことが分からない」ことであって、就職以前に自分の中の「働くこと」の価値や意味づけが不十分なことだ。

應典院の「OSAKAアートコミュニティプロジェクト」のねらいは、アーツによる人材育成である。太田さんの説を借りれば、人材とは自己の能力を活かすことのできる「仕事人」であり、「組織人」以上にいっそうの独自性と自立性が求められる。それはけっして芸術の専門家に限らない。創造的

應典院では、新しい育成事業として、昨年の秋以来「OSAKAアートコミュニティプロジェクト」に取り組んできた(大阪・まちの賑わいづくり事業コンペ選定事業)。

ここでは2003年11月より04年3月までの期間、規模も対象も異なるアートセミナーを連続し

て開催、最終的にはその受講者の中からNPOやコミュニティビジネスといった、新しい地域の担い手を養成することを目論んでいた。

全体を3期に分け、1期の「コモンズフェスタフェスタ2003」(03年11月7〜9日開催)ではプロのアーティストとの交流やワークショップ体験などがあり、(美術作家・北山善夫、舞踏家・岩下徹の協力を得た)、2期の「まちとアートの練習問題」(04年1月24・25両日)ではアーツをテーマに働く人々を現場に訪ね、3期「アーツなお仕事発見セミナー」では少人数の合宿やセミナーを通して「芸術と仕事」について徹底的に議論しあった。3期それぞれを対象は異なるが、のべ1000名の若者たちが参加、アーツをテーマに「働くこと」の意味を訊ねた。ゲストの一人の太田肇さん(同志社大学教授・組織論)は、これからは、「組織の論理」ではない、個人を重視した「仕事・組織・社会」への転換を提唱してくれた。

芸術は額縁や舞台の中でのみとらえられるものではない。また、芸術の仕事も、作家や専門施設員になることだけに規定されるものではない。アーツが生み出す創造力や批評力、関係構築力や問題提起力など、それを自分の社会的スキルとして高



を現代に打ちたてることだったのである。

### アーツと仕事を結ぶ

てきた拠点としての可能性でもある。今は「葬式仏教」と揶揄されるが、そのゆたかな資源力は未だ枯渇していない。寺が劇場空間に生まれ変わって、そこから寺本来の役割を再生してゆく。應典院の再建とは、育成の拠点という、古くて新しいお寺のポリシー

な感性を教育や福祉の事業に活かしたり、NPOやコミュニティビジネスを起業することもできる。芸術にただ奉仕するだけではなく、アーツを通して、自らのエンプロイアビリティ(雇用能力)を高めることができるのである。

第3期のセミナーで彼ら彼女らは、実際にアーツを活かした仕事の現場に学んだ。

社会福祉法人素王会の理事長 今中博之さんは、日本初の、デザイン・芸術分野に特化した知的障害者の授産施設アトリエ・インカープを作った。葬儀社のリブ・グリーンの渡辺美智子さんは、故人や遺族の声を活かした、個性的な葬儀場「自然庵」の女性プロデューサーだ。また、一級建築士の中谷ノボルさんは、都心の中古ビルを再生して、新しい都心居住や起業を支援している。いずれも高い創造性に裏打ちされた、アーティストの仕事を確認している。芸術的感性を活かしながら、「市場」に参加する新しいタイプの仕事人といってもいい。地域の中に溶け込み、人間の生活や暮らしとつながる仕事は、大企業とは違うやりがいにあふれている。

雇用不安の時代を生きる若者たちに対し、本当に必要な支援策とは、明確な職業意識を養い、仕事に対し自分らしいモチベーションを高めることだ。

子屋の歴史からわかるよう、寺と庶民教育には長いつながりがある。しかし、その教育が近代の学校教育の祖形であったというわけではない。寺子屋とは、教壇も時間割もない、学ぶ側の多様性を最大限に重んじた場であり、そこでは、「教える」という教師の側からではなく、「学ぶ」という学習する側から教育が組み立てられていた。近代の集団一斉教育とはまったく異なる、師匠と弟子による対話型の教育があったといえる(日本歴史学会の復権)。

應典院の人材育成もまた、数々の対話と協働の上に成り立っている。冒頭に述べた「舞台芸術祭」は参加する劇団からメンバーが集まり、自分たちで演劇祭を企画し、作り上げる。「HPF」では、アマチュアの演劇人がさらにアマチュアの高校生をサポートする。権威者もカリキュラムも用意され

組織の歯車として組み込まれるような労働を促すのではなく、自身の創造性を発揮できる仕事の提案や創出をサポートすることだ。それには、従来の職業斡旋所や大学の就職部とは異なる、「働くこと」の価値を開発していくような人材教育の拠点が必要となる。

應典院が目指す育成の拠点とは、そんなアーツと仕事の結び目から生まれようとしている。

## 対話と協働から育つもの

應典院には他にも、数々の育成の場面がある。

すでに41回続く「寺子屋トーク」は、人間の生き方を学ぶトークイベント、毎年秋に開催される「コモンズフェスタ」は、NPOとアーティストの協働による大型フェスティバルで、市民活動の支援と育ちの場を提供している。定期的な講座として、「竹内敏晴のからだことばのレッスン」や「上田假奈代の詩の学校」などは、もう何年も続くセミナーである。演劇や現代美術の空間でありながら、多様な学びの空間でもある。いや、その異質性のカオスにこそ、人は育つといふべきだろう。

かつて寺子屋は、日本人の学びの原点であった。寺

ていまい水い関係から出発しながら、当事者たちが対話を重ね、知恵を結集することで、共通の目的が達成されてゆく。そこに、本当の自他相互のコミュニケーション、パートナーシップが育て上げられてゆくのである。

これからの時代に求められる人材とは、違いに学び、つながりに気づく、多様な関係性に生きることのできる人であろう。アーツが、NPOが、私たちに教えてくれるものも、新たな人材の価値そのものに違いない。

優れた人材が新たな仕事をつくり、魅力的な地域を作る。育成の拠点とは、そんな人材を通して次の時代を見通し、また現代の社会を少しづつ変革していくものでありたい。それこそが、現代のお寺、應典院の目指す課題なのである。

## ※大阪：まちの賑わいづくり事業コンペ

大阪府と大阪商工会議所が、大阪青年会議所の協力のもと実施。芸術文化、生活文化、地域文化、歴史文化などをテーマとし、これらに関するコミュニティ・ビジネスを通じて、まち・コミュニティに働きかけ、その活性化を図ることを事業プランを募集した。特色ある地域文化の振興をはかるとともに、地域活性化と雇用創出をめざす。2003年度は応募総数71件から、支援対象先5件のひとつとして、應典院寺町倶楽部が選ばれた。アーツで若者の「雇用」を育てる。

## 大阪：まちの賑わいづくり事業

### 第1回勉強会のご案内

「OSAKAアートコミュニティプロジェクト」について秋田が報告します。ご関心のある方はふるってご参加ください。

○日 時:10月20日(水)  
19:00~21:00

○場 所:應典院 研修室

○参加費:500円

※詳細は、大阪商工会議所地域振興部・本(もと)さんにお問合せください。

Tel:06-6944-6323

今日  
キミに  
会えた

そのことを

昨日の  
ボクに

教えて  
あげたい

諦めかけている人がいる  
幸福になりたいくて  
旅をはじめたはずなのに

夢と出会えず  
愛とはぐれて

迷子につかれて 涙も出ない

Word

咲セリ

Clay Art

山本可南

「言ノ葉綴り」

ちっちゃな感動をポケットにつめながら、こぼれたドラマを言葉で綴りほめる

「つちびと作家」

ひとつひとつに物語の流れるような あたたかくせつな人間形を生む

西島 ●ボクは應典院の再建プロジェクト段階から関わらせてもらっていますが、最初から、このお寺が何で社会に開いていくのか、はつきりとして見えていたわけではありません。逆に実際に應典院がスタートしてから、現実の活用や運営を見ながら、「このお寺で何ができるのか」という問いを抱えながら、だんだん方

秋田 ●ボクは應典院の再建プロジェクト段階から関わらせてもらっていますが、最初から、このお寺が何で社会に開いていくのか、はつきりとして見えていたわけではありません。逆に実際に應典院がスタートしてから、現実の活用や運営を見ながら、「このお寺で何ができるのか」という問いを抱えながら、だんだん方

秋田 ●ボクは應典院の再建プロジェクト段階から関わらせてもらっていますが、最初から、このお寺が何で社会に開いていくのか、はつきりとして見えていたわけではありません。逆に実際に應典院がスタートしてから、現実の活用や運営を見ながら、「このお寺で何ができるのか」という問いを抱えながら、だんだん方

秋田 ●應典院は97年の再建以来、「学び・気づき・楽しみ」をキーワードに、「場」や「人」の出会いの関係を育んできました。同様に應典院寺町倶楽部(以下、倶楽部)も、出会いのための支援、サポートをテーマにさまざまなプロジェクトに取り組んできました。西島さんは当初より舞台芸術担当委員を担当してくださっていますが、そもそも應典院で舞台芸術というねらいは何だったと思いますか。

秋田 ●それがまた結果的に、お寺の原点である「学び・癒し・楽しみ」にリンクしていくという実感もありますね。西島 ●えええ。お寺という場所の求心力なんだろうが、逆にここに馴染まないものは、1、2年で溶解していききましたね。特に舞台芸術祭は、お寺という特殊な空間の中で表現を成立させるということにおもしろさを感じていましたので、スペースに対して表現が対峙するイメージから、space (空間) × Drama (表現) と名付けたんです。

秋田 ●音楽もあつたし、舞踏とかマイムもあった。「表現の自由区」といいたがら、「こった煮の感覚は否めませんでした。西島 ●そうですね。で、昨年から現代演劇のみになった。実際に應典院を拠点にする表現者は大半が若手劇団だったし、それに絞り込むことで、「場所との対峙」を真っ向から考えられるのではないかと思います。

## 場所との対峙

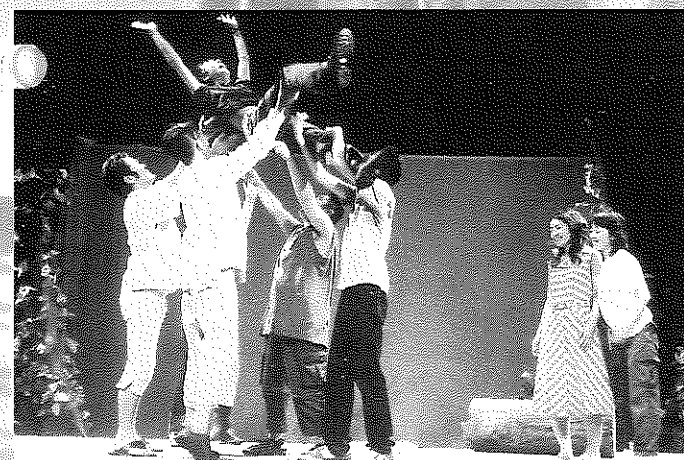
秋田 ●音楽もあつたし、舞踏とかマイムもあった。「表現の自由区」といいたがら、「こった煮の感覚は否めませんでした。

秋田 ●音楽もあつたし、舞踏とかマイムもあった。「表現の自由区」といいたがら、「こった煮の感覚は否めませんでした。

# SPACE×DRAMA2004から、新しい演劇のコミュニティを創造する。

語り手:西島 宏(應典院寺町倶楽部舞台芸術担当委員)  
秋田光彦(應典院主幹)

2年目を迎えた、應典院寺町倶楽部のアートサポートプロジェクト「Space×Drama」。  
演劇から新しいコミュニティの應典院における芸術支援のあり方を探る。





こが論議され尽くしていないようにも思います。

ボクはまず、若手の劇団が存在し公演を続けることが何より重要だと思っています。未知数の可能性を持つ集団がある、ということこそは、観客だけでなく、なによりその地域に

とって極めて不可欠なことだと思いますね。

秋田●私は、そこで芸術の持つ公益性みたいなものを伝える必要があると思っています。

演劇を作品評価と別に、社会評価としてとらえた時、「支援」の問題と併せて、何を語るべきなのか、とても関心があります。

西島●5年以内という段階にある劇団は、ともすれば芽も出さずに消え去ってしまうかもしれませんが、それを見逃さずのでもなく、また引っ張り上げるのでもない。いわば卵が雛になるまでのサポートをする。

ボクは、「支援」の意味は「一緒に育つこと」と近しいと思っています。演劇的な質を向上させることだけではなく、若者たちの人間性を深めていくインキュベーションなのです。現実には、昨年の舞台芸術祭のあとで解散してしまった劇団がありましたけど、しかしそれもひとつ

の選択であり、「新たな孵化」であると感じています。

秋田●芸術の環境づくりですね。とくにいまいわれたようなインキュベーションには、演劇と社会をつなぐマネジメントが非常に重要ですね。

西島●そう、公演の制作マネジメントとは違う意味で、社会的なマネジメントが大切です。

秋田●同じことは、文化行政や企業メセナの担当者にもいえることです。なぜ未知数の芸術を評価しなくてはならないのか、単なる新人の発掘というようなものと違う価値軸を見つけ出さなくてはならないと思います。

西島●実際はわかりませんが同感です。しかし、そういうマネジメントこそ単発のボランティアでは限界があります。また倶楽部の会員や運営委員に直接劇団が参加していないという現実もあります。目の前

ごく重要だと思っています。

西島●それって、昔ボクに語ってくれた、地域で人材を育ててきたお寺の役割と重なってきますね。

秋田●そうですね。その「人材育成」の歴史を、演劇を通じて再現している感じですね。

西島●もうひとつ、ボクは開いていく場所としてめぐり合えたる應典院になればと考えています。

閉じていく場所では、演劇は意識的な管理下に置かれてしまふ。表現者にとって、生半可な空間ではないところでお芝居をするとは、たいへんなことです。しかし同時にその空間に果敢に挑戦できる、というキヤパシティの大きさが應典院の魅力であってほしいと思います。

「支援」とは  
いっしょに育つこと

秋田●この舞台芸術祭では03年が

ら若手演劇人への育成をテーマに打ち出していますね。

私は、「育てること」とは、時間と関係の幅の中で、彼ら彼女らが「自ら気づき、育つこと」だと思うのですが、このプロジェクトの意図はどのようなことだったのでしょうか。

西島●実はボクたち倶楽部は、残念ながら演劇としての質を高める専門性は持ち合わせていません。

当初、ボクたちは「制作を教えます」と打ち出しました。企画書の作り方や広報のノウハウとか、そういう実用的な知識を提供しようとしたのですが、実際に劇団とやりとりをしていくうちに、それはひとつのテクニクであって、ほんとうの意味で「育てること」は「一緒に育つこと」と知った。ともに学ぶ、というのが、でしょうか。

秋田●どういふことですか。

西島●舞台芸術祭に参加している劇団の若者たちにも、当然ですが多

様な人格や生き方があるわけですね。そういう若者たち一人ひとりとどんな関係を創り出せるのか。そこをスタート地点として「制作とはなにか」という課題を模索していかなければ、肝心なことは見えてこないのではないかと。最初から「公演のための実用スキル」を身につけるため、舞台芸術祭があるわけではありませんが。

秋田●そのことと、今回の舞台芸術祭の参加資格も関係あるのでしょうか。キャリア5年未満の劇団に限るという条件は非常に大胆な発想ですよ。また評価されていない、未知数の劇団をなぜ支援するのか。相当説明的なねらいがあると思うのですが。

西島●深い意味はなかったのですが、應典院ならこうだろうといった感じ。最近では、いろいろな劇場が「支援」を色濃く打ち出していますが、そもそも「支援」とは何か、そ

## 教室。そして 劇場であるということ。

文●演劇担当:柳澤尚樹

競い合うことで作劇の精度を高めるのがコンクールならば、High school Play Festivalは創造の楽しさを学ぶ「教室」にちがいない。

全国でも最大規模を誇るこのフェスティバル、本年は三つの劇場を会場に、7月17日を皮切りに24校が参加、合わせて22作品が発表された。

昨年より会場のひとつとなった應典院では、18日より8日間、8校が熱い舞台を繰り広げた。1年間の内の、たった8日間であるが、應典院スタッフである私にとって、「見守り、見届ける」ことの難しさを痛感するひと時である。

演劇部員と顧問、技術管理スタッフ、そして劇場が、3ヶ月に渡ってひとつひとつの舞台を創りあげる。コンクールに較べて圧倒的に時間があるからこそ、「やりたいこと」は際限なく浮かんでくるものだ。

それぞれの立場から、実現に向けてあらゆる知恵を絞っていくが、この模範解答のない「宿題」は本番終了まで答えがでることはない。

演劇経験の違いを除けば、高校生た

ちと私たちスタッフは「今、ここで何ができるのか」という課題を学びあう、同じ「生徒」である。経験や価値観の違いを理解すること、そして粘り強く、繰り返し対話すること。この過程を通して、共有する関係とは何かを探っていく。

その果てに初めて、少しだけ、自分自身にも、他人にも、もう一度だけ向き合っ、て、なにものかを変えていこうとする勇氣と希望が生まれてくるのではないか。だからこそ、まずお互いに努力したこと、創り上げた過程そのものを評価すべきなのである。

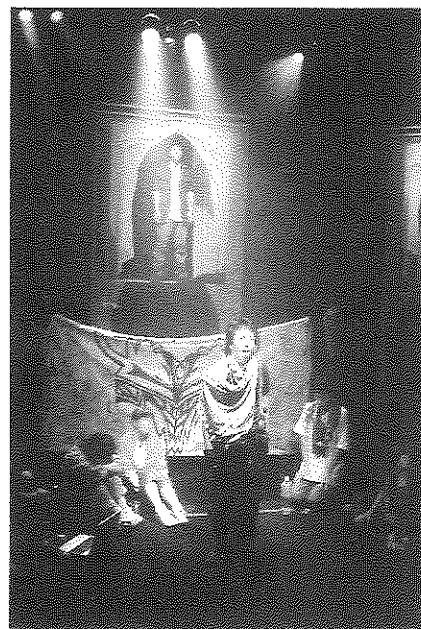
毎年、新顔を迎え入れる教室は、いつも変わらない姿でそこにある。そして実は、誰にとっても同じ教室でありつづけるために、その「場」を創りだす人々は絶え間なく変わりつづけているのだ。

いつの日か「教室」が「舞台」になる時に向けて、私たちも劇場も、変わり続けていきたい。そこに演劇の、表現の底力があると信じている。

秋田●これからの舞台芸術祭はどんな方向性に進んでいくのでしょうか。  
西島●今後の運営体制は実行委員会的な形式で行なっていく予定です。この2年間、試行錯誤してきたことを

### 異なる価値観に 出会う

にはいろいろな課題は山積していますね。



秋田●芝居の上演だけが目的の舞台芸術祭とは違う、もっと「場や人」にこだわった関係を創り上げていくというわけですね。参加する劇団にもかなり覚悟が求められますね。  
西島●そうですね。ちょっとうるさそうかもしれませんが、でも、参加する劇団の人たちには、そこに大きな関心を持ってもらえとうれしい。もちろん、この舞台芸術祭で得たさまざまなネットワークや

整理して、より明確に進めていこうという考えからです。マネジメントとはなにか、自ら育つとか、社会に開くとはどういうことかを、参加劇団との対話を重ねながら探っていくと思っています。

スキルを、今後の自分たちの活動に活用していただけたらとも思っています。  
秋田●前半におっしゃった「空間に挑戦する」とか「場所と対峙する」とは、そういうことなんですね。  
西島●さいわい應典院には真剣に生きている人が多く集まります。異質の価値観や人材と出会う可能性にあふれている。この舞台芸術祭の最大のメリットは、当たり前の演劇祭とは違い、人間的なコミュニティや大きな価値観と出会うことだと思っていますし、そういった体験が人間として大きな育ちにつながるはずですよ。  
秋田●なるほど。それがこれからの多文化社会を生き抜く基礎体力になっていきますね。今日はありがとうございました。

# 「人生の完成期」と向き合って生きる

「私と「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」」

大蓮寺・エンディングを考える市民の会事務局長

田中いずみ



2002年に大蓮寺墓苑に建立された生前個人墓「自然」は「自己決定」と「結縁」のテーマにした、全く新しい集合墓だ。また「医療」「葬送」といったエンディング分野の専門家と、「開かれたお寺」應典院が出会えたことが、お寺とNPOの協働という新しいスタイルのエンディングサポートを生み出した。NPO「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」の事務局長が、その活動の現在をレポートする。

「お別れ会の際の写真送ります。落ち込まず、明るくやっておりまでするので安心ください」少し太めの黒インクで書かれた、馴染みのある温かな字。60代男性のTさんから送られたお手紙の一節だ。同封された数枚の写真には、喪服を着た私がにこにこして写っている。

お葬式なのに笑顔なんて不謹慎だったかしらと思いつつ、あの日を思い返して、胸に熱いものが押し寄せてきた。私はTさんが心をこめて作られた奥様の葬儀に参列できたことがうれしかったのだ。手紙のあて名には、大蓮寺・エンディングを考える市民の会、田中いずみ様と書かれている。

## ■血縁を超えた結縁の可能性

お寺とNPOの協働という新しいスタイルで、エンディングの社会化をめざすこの会は2003年1月に設立された。その事務局長を務める私は、現代におけるエンディング文化の状況も、NPOが

何たるかにもなにとつ知らず、この分野に飛び込んだ。

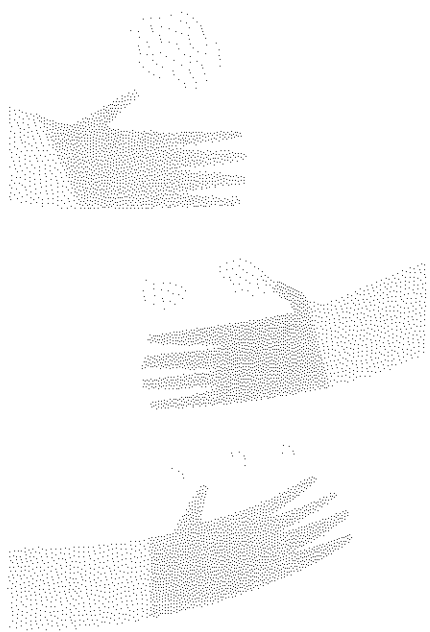
「エンディングは人生の完成期」、「死を見つめることは今を生きること」というテーマが、頭の中にすんなりと入り込んできて、私を強く突き動かしたのだ。

それまで福祉用具や、高齢者向け商品を扱う展示場で企画の仕事をしていた私は、高齢者が多数派となる社会において、大事なものはモノでなく心であり、QOL(クオリティオブライフ)を高めるための消費者意識ではないか、と自問していた。たからかもしれない。不思議なことに、「エンディング」という言葉に少しもマイナスイメージを感じなかった。生前の個人の意志と、会員相互の交流を重視した大蓮寺の生前個人墓「自然(じねん)」がその活動の理念であり、

戸であるということも社会的な意義の高さと先進性を強く感じさせた。

最初の仕事は、日本の墓の現状を知ること、應典院というお寺が培ってきたネットワーク、「いのち」の専門家集団とすべきる団体の人と活動に出会うことだった。

墓について知ろうとすると、日本の家族が見えてきた。戦後民法の施行で家制度が消滅したにもかかわらず、旧態依然と〇〇家を冠する家墓(いえばか)は、そ



の後継者問題が深刻になっている。子どもがいない、もしくは娘だけの夫婦、そして離婚率、非婚率ともに高い現代では単身者、いわばひとりで生きる人が確実に増加していて、お墓の継承どころではない。少子高齢社会、個の時代、と活字で目にするだけではわからない実態が横たわっている。

今、人は死に向き合う長い時間の中で頼るべき家族をなくし、制度疲労した慣習にすぎることの空しさに直面している。医療も病院にまかせておけば安心、とは言えなくなった。介護保険は事業者との契約が基本。痴呆になった時にそなえて後見人を定める任意後見制も始まった。そんな今だからこそ、情報収集と自己決定の重要性が問われる。

そこで自明となったことは「人はひとりでは生きること死ぬこともできない」ということ。「血縁を超えた結縁(けちえん)」の可能性は、NPOと呼ばれる市民の非営利活動の中で大きく育とうとしている。つまりは新しい家族のよう

った時をささえあう動きが、市民活動として生まれているのだ。

市民の会がネットワークしている5団体は、医療や葬送、お金とライフプラン、仏事など、エンディング分野の代表格。それぞれは接点のなかったNPOを中間支援者としてバックアップするのが本会の仕事と言える。各団体と共催したエンディングセミナーは、現在までに通算19回、今後の活動を通知希望の連絡会員は400名近くを数える。

### ■「いのち」をめぐる思い

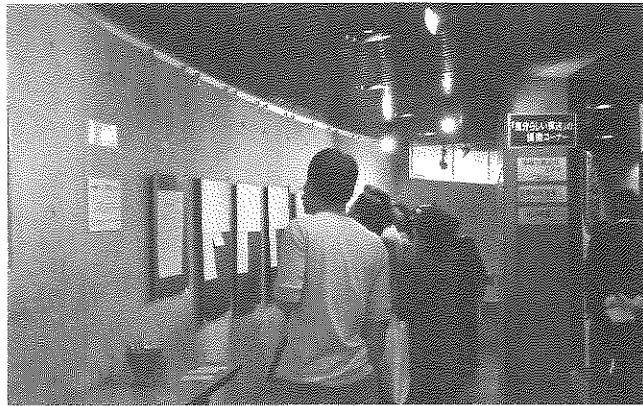
当初私は、企画をNPOに頼り、セミナーの参加者を集めることで精一杯だった。けれど、エンディングテーマを渴望していた人々の反響の大きさは目を見張るものがあった。

生きて語る死は、もはやタブーではない。それどころか、語る場所、語り合う仲間を求めているといつていいだろう。セミナー後の質疑やアンケートの自由記

ここで参加者が語るの、ほとんどが私たちの死別体験、看取りの回想など。多くは、「体裁のために華美なお葬式をしたがあれで本当に良かったのだろうか」「葬儀社にまかせたら予想以上にお金がかかった」などの反省意見。だが、そんな中にも「死期を悟り、家族へのねぎらいと葬儀等の指示を簡潔にいい遺した母親の死に様が、自分のお手本であり今を生きる糧」と語る女性が印象的だった。

参加者はそうやってめいめいの体験を共有していく。そしてワークシートの設問に記入しながら、いよいよ自分の葬儀のデザインを始める。人生最後の舞台の表現だ。

10数名の参加者の中には、自分ではなく奥様の葬儀プランを書いた方がおられた。冒頭そのお手紙を紹介したTさん、60代。10年前に脳梗塞で倒れ、要介護から寝たきりの状態になられた奥様は15歳上の恋人房だという。彼のプランはシナリオだった。感謝の言葉、挿入される音楽、花の配置もちゃんと書き込まれ



▲エンディング見本市で展示された「私の葬儀プラン」

ていた。今にも実現可能に思えた。

けれど机上のプランを実現するためには、専門家である葬儀社との打ち合わせと事前の準備が必要だということ。私はTさんのその後何度かの連絡を通じて教わった。彼は、容態の安定しない

述に触れるうち、エンディングを語る社会的な場づくりが新たな本会の使命と感じるに至った。

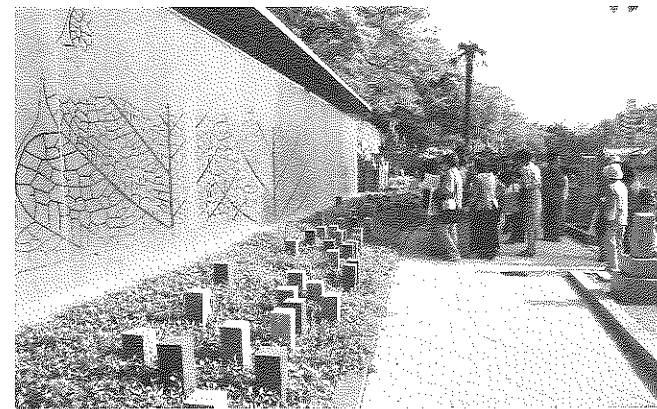
そこで始めたのが「私の葬儀プラン」ワークショップだ。まず、葬儀とは何か、プランを考える意味を勉強会で語り合う。

奥の看病をしながら、遺影や葬儀会場に飾る想い出の品を整理し、準備されたのだ。

7月のある暑い日、奥様は息をひきとられた。そしてTさん手作りの、愛妻を弔うお別れ会が近親者のみで執り行われた。闘病の経過、自宅と病院の行き来の日々のエピソードを語るTさん、参列者が一言ずつ故人に向ける言葉、その場を共有した人にとってあの葬儀はお別れではなく、Tさんと奥様のもう一つの結婚式だったと思えてならない。

その証拠に写真には、にこにこしている私だけでなく、実に晴れ晴れとした表情で司会をつとめるTさんが写っている。

エンディングの社会化という大命題に向かって仕事を進めるうちに、人生を完成させる「時間」と「思い」のかけがえのなさを身をもって経験することができた。私の使命は、そんな「いのち」をめぐる思いを、人から人へつなぐことなのではないか。今そんなことを考えている。



▲お墓ツアーで生前個人墓「自然」を見学する人々



秋田光彦主幹から……

# こんごまい

呼吸するお寺・應典院の、4月～8月の活動記録です。  
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

## 4 月

◇1日(木)

應典院本堂にてパドマ幼稚園の新任職員就任式。厳かな雰囲気の中、新しい一年の発表を誓う。創教出版に新たに山内貴江さんを迎える。

◇2日(金)

恒例の夜校会。大蓮寺の桜をライトアップ。運営委員の関浦さんのご紹介もあって、24名が参加。

◇4日(日)

第9回なにわ人形芝居フェスティバルを下寺町全域で。生憎に小雨模様で、急遽應典院本堂で子どもたちと山

会を開催。

◇9日(金)

山形県酒田市の東北公益文科大学に間瀬啓允先生を訪ねる。「宗教と公益性」をテーマに懇談。

◇12日(月)

京都大学工学部高田光雄研究室のゼミ生15名が應典院を見学、私からコミユニティシアターの可能性について述べる。

◇13日(火)

舞台芸術祭(以下SD略)制作会議。西島池野、柳澤が参加。

◇15日(木)

第39回いのちと出会う会「人間として生を受けた喜び」。ゲストは私塾わんど塾長の山藤忠雄さん。

◇17日(土)・18日(日)

大蓮寺と應典院を使って「エンディング見本市」の開催、テレビ取材が4局、参加者50名という壮大なもの。事務局長の田中いすみの奮闘が窺える。

◇20日(火)

應典院の今年度方針についてスタッフに述べる。今年は充実の一年に。

◇25日(日)

大蓮寺にて五重さらえと7年ぶりの輪番御忌厳修。導師として初めての太舞台は感無量。

◇28日(水)

寺町倶楽部の会員さんにチラシ発送。

◇29日(祝)

NHK報道部の取材。應典院と下寺町取材をしたいと。

## 5 月

◇1日(土)

浄土宗滋賀教区のT師がお寺のNP

O事業について相談。

◇6日(木)

應典院の劇場活動率向上のための会議。

◇7日(金)

真宗大谷派青少年センター準備委員会の面々が應典院を見学、懇談。夜にシチズンシップ共育企画のWS開催。

◇10日(月)

大蓮寺生前個人墓「自然」のグッドデザイン賞応募の打ち合わせ。建築家の荒川朱美先生と。

◇12日(水)

SD制作会議。

◇14日(金)

新年度の第1回運営委員会。この一年の事業計画案について協議。

◇18日(火)

会員さんへ総会案内発送。

◇20日(木)

第40回いのちと出会う会「人生は逆転

できる」。ゲストは人財育成コンサルタント笹岡郁子さん。

◇21日(金)

新スタッフ・山崎しゅうすけ君を迎えエンディング事務局会議。夜に大阪市大学院創造都市研究科の社会人院生の見学と講演。佐々木雅幸教授と懇談。

◇26日(水)

應典院勤務のスタッフ全員を集め、初めての月例会。本堂で全員で回顧ののち、20分ながら「仏教と社会」について述べる。夜は全国青少年教化協議会の神仁課長来山。

## 6 月

◇1日(火)

大阪府社会福祉協議会総会、記念講演を担当。

◇2日(水)

いのちと出会う会番外編、タイの日本人僧侶・藤川清弘師を囲んで。

◇3日(木)

SD制作会議。

◇1日(土)

應典院全館で共催事業「風人の祭2004」開催。若き沖縄のパワーに圧倒される。

◇6日(日)

一心寺日想殿にて上町台地からまちを考える会1周年記念シンポジウム。新しい起業の事例として、大蓮寺のエンディングサポートについて田中さんと発表。

◇7日(月)

事務局会議。

◇8日(火)

真言宗高野山のスピリチュアルケア研究会一行の見学と講演。引率は旧知の天下大圓師。

◇9日(水)

「エンディングとグム教」セミナー第1回相談から見える仏教の現状と課題。講師は山崎正矩師。テレビ大阪取材。

◇11日(金)

寺町倶楽部総会。12名出席。ごじんまりと、しかし実りある総会。

◇13日(日)

大蓮寺護持会総会。午前には恒例の墓  
回向。

◇15日(火)

倶楽部の会員さんへ総会資料発送。

◇17日(木)

第41回いのちと出会う会「人生は逆転  
できる」。ゲストは釜崎の里・  
莊保共子さん。

◇21日(月)

應典院十大蓮寺エンディングを考え  
る市民の会合同懇親会。イタリヤ料理  
に舌鼓。

◇22日(火)

月例会。「公益と民間」について述べる。  
◇23日(水)

「エンディングと仏教」第2回「私らし  
い逝き方」日本人とお葬式。講師は  
真宗大谷派瑞興寺住職・清史彦師。

◇24日(木)

元インターンの来馬さんと辻さんが  
ひょっこり訪問。卒業生との再会がう  
れしい。

ヘチラン等発送。

◇26日(月)

事務局会議。

◇27日(火)・28日(水)

SPACE×DRAMA2004月  
曜劇団「なつあそび」公演。165名動員。

◇30日(金)

PAMO舞台芸術見本市に参加。劇団  
ボランティアのみなさんの応援に感謝。

◇30日(金)・8月1日(日)

SPACE×DRAMA2003三  
者協働プロデュース公演「劇団鹿殺し  
「愛」情」546名動員。

◇2日(月)

NHK文化部の取材。

◇3日(火)

読売新聞取材。お盆の明かりについて。

◇3日(火)・4日(水)

SPACE×DRAMA2004ネ  
コノハナ劇場「アオゾラ、方程式、その  
ウメカタ」141名動員。

◇28日(月)

埼玉県のさいたま市議員の見学とヒ  
アリング。舞台芸術祭の記者発表を本  
堂ホールで開催。

◇30日(水)

「エンディングと仏教」第3回「都会の  
お墓最新事情」終の棲家を考える」。  
会場を大蓮寺客殿に移して開催。私が  
講演を担当。

7月

◇2日(金)

追手門学院大学で講演。アートボラン  
ティアについて。夜は、西島宏運営委  
員参加して寺子屋トークの運営打ち  
合わせ。

◇5日(月)

プリンストン大学院生のマーク・ロウ  
氏の永代供養墓についてヒアリング  
取材。

◇6日(火)

SD制作会議。

◇10日(土)

第41回寺子屋トーク「がんばれ仏教!」。  
満堂の120名が参加。ゲストの上田紀行  
さんとお連れ合いのNHKアナウン  
サー武内陶子さんも来山。開会后、ス  
タッフと一緒に鶴橋の焼肉で乾杯!

◇13日(火)・14日(水)

SPACE×DRAMA2004の  
第1弾、満月動物園「庭園楽曲」公演。  
私が特別出演! 132名動員。

◇14日(水)

寺子屋トークふりかえり会。

◇15日(木)

第42回いのちと出会う会「ガンを超え  
めざせ地平線」ゲストはサイクリスト  
のエミコ・シールさん。

◇17日(土)

昨年に続き、「ハイスクール・ブレイ  
フエスティバル」が開会、28日まで8  
校11公演、のべ1340名を動員。10  
代の若々しいエネルギーに圧倒された。  
◇21日(水)

例会。「人材資本の開拓」。会員さん

◇4日(水)

下関市に出張、20年前に書いた原作が  
映画化、「カーテンコール」(佐々部清  
監督)の撮影現場を見舞い。

◇5日(木)

番外詩の学校「お盆地編」それから。  
上田假奈代さんと墓地で詩を詠む。  
同夜、「ビルでお盆」の集い。

◇6日(金)

大蓮寺夏の恒例の盆棚経詣。同月15日  
まで22軒の檀家宅を巡拝。

◇10日(火)

東京外大の町田宗鳳教授が来寺見学。

◇10日(火)・11日(水)

SPACE×DRAMA2004劇  
団「レトルト内閣」あつばき 愛あれ  
ば君、逝かずにすんだものの「285名動員」。

◇17日(火)・18日(水)

SPACE×DRAMA2004劇  
団「ショウダウン」ドラゴンスピリット  
「グロバルフォース戦記」98名動員。  
◇19日(木)

大蓮寺夏の盆施餓鬼大法要。

◇9日(金)

事務局長の池野、浄土宗の少僧都養成  
の短期修行に入行。

◇23日(月)

應典院9月の予定確認、雨天のため恒  
例の地藏盆は延期。

◇24日(火)

應典院勤務のスタッフ9名のスタッ  
フ交流会。空堀地区を見学、山口洋典  
さんのレクチャ。

◇25日(水)

月例会。「社会起業」について述べる。

◇26日(木)

美術評論家の加藤義夫さんと面談。来  
春の大阪力レイドスコープの美術展  
について意見交換。

◇27日(金)

流通商科大学の加藤政洋助教授、来山。  
秋の寺子屋トークについて打ち合わせ。  
下寺町の魅力を語っていただく。

◇29日(日)

アーツなお仕事発見セミナーの自主  
グループの勉強会。

# 應典院寺町倶楽部 ラインナップ

## いのちと出会う会

いま満ち足りた時代だけれど、  
なぜだろう。  
悲しみが見えにくい。  
生きる力がわきあがらない。  
いつか来る「人生の店じまい」を見据え、  
生きること、老いること、  
病すること、そして死について  
じっくり仲間と語り合いたい。  
そんな集いが「いのちと出会う会」です。  
※いずれも第3木曜日18:30~21:00まで

第44回 10月21日(木)  
「生命からのメッセージを伝える」  
話題提供者:米村幸純さん  
(TAV交通死被害者の会事務局)

第45回 11月18日(木)  
「フィリピンへ虹の橋を」  
話題提供者:片岡春樹さん  
(片岡鍼灸整骨院院長)

第46回 12月16日(木)  
「人生の金メダリストになるために」  
話題提供者:中野真理子さん  
(バレーボール五輪金メダリスト)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX06-6770-3147

メール info@outenin.com

## まちの学校 上町四方山話シリーズI 「てらまち極楽ストーリー」

上町台地の寺町から、いのちの贈り物。  
歴史、文化、芸術、そして生と死をめぐる  
フィロソフィー。いちばん古いまちに、  
とびきりの創造力がありました。だれ  
も知らない、大阪の都市の魅力、全部見  
せます。

第1話 寺町・いにしえ編  
11月6日(土)14時~16時  
「極楽ものしり学入門」  
講師:山名雄光(心光寺住職)  
会場:心光寺

第2話 寺町・現代編  
11月13日(土)14時~16時  
「極楽のまちづくり」  
講師:高口恭行(一心寺長老・建築家)  
会場:一心寺北会所

第3話 寺町・アート編  
11月19日(金)19時~21時  
「極楽・声と音のアート」  
出演:三帰会  
ゲスト:上田假奈代(詩人)  
会場:大覚寺

第4話 寺町・まち暮らし編(第4回時屋トーク)  
11月23日(祝)14時~17時  
「極楽タウン・わたしたちの寺町について語ろう」  
講師:加藤政洋(流通科学大学助教授)  
ゲスト:渥美公秀(大阪大学助教授)  
宋悟(コリアNGOセンター代表)  
秋田光彦(應典院主幹)  
コメンテーター:高田光雄(京都大学教授)  
コーディネーター:山口洋典  
(上町台地からまちを考える会事務局長)  
会場:應典院

参加費:1話・2話…800円(学生500円)  
3話・4話…1500円(学生1000円)

※4話は寺町倶楽部会員は1000円

※事前販売のみで4回フリーパスがあります(3800円・一般のみ)

※お申込は事前にFAXまたはメールでお申込く  
ださい。定員になり次第、締め切ります。

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター

サリュ  
Vol.43

## 編集後記

■次だけをながめてみると、改めて應典院で出会う  
多くの人たちの多様さに目をみはる。この場で、時  
には芸術を語り、死を語り、そして雇用や仏教を語って  
いる。関心は実にさまざま。

冒頭のインタビューで伊藤さんは、自分を受け入れて生  
きることの大切さを語り、その上で共通の悩みを持つ人  
が支えあいながらも、けっして閉じこもらないことを力  
説された。つまりそれは容易に理解し、共感を得られる  
関係に身をゆだねるだけではなく、敢えて共通項を持ち  
えない出会いのなかに飛び込んでいくことのススメだ。

真摯に創作に向かうがゆえに、自分たちの世界に閉じこ  
もりがちな劇団は、S×Dの参加によって演劇以外の多  
くの出会いかから、確かに「何か」をつかみ取った。またT  
さんは、配偶者のエンディングを見据え、参加したセミ  
ナーをきっかけに、あらゆる分野の協力者の支援を得て、  
すばらしいお葬式をあげられた。いずれも、いつもの関  
心から一歩踏み込んだ結果生まれたそれぞれの実りだ。

また「アーツなお仕事発見セミナー」は、「就社」に代表さ  
れるような固定的な職業観から、自ら創造的に働くこと  
の意識転換を促した。既存のシステムに合わせるのでは  
なくて、仕事創出の提案であったために、参加者は自ら  
と向き合わざるを得ない。より積極的に主体的なはたら  
きかけが必要だったが、かなり濃密な対話を続けていた  
ようだ。

ここで出会い、お互いの関心の枠を越境し、ハイブリッ  
ドで有機的な「何か」を生み出す可能性は無限に秘めら  
れている。「がんばれ仏教」の対談で語られていたように、  
寺院を生かすのは「人」である。この寺院空間は今を生  
きる人にとって、つねにどうあるべきかを問いかけ、呼  
びかけていかなければならない。多くの人の参画があっ  
て、交流と協働を経て、はじめて現代に息づく寺院がつ  
くりあげられる。

サリュが大幅に紙面を刷新したのは、できごとの報告で  
はなくその内側から聞こえてくる声を届けたかった  
からだ。そのため、発行回数は年2回となり、次回は2月  
発行予定。お読みいただいた感想はいかがだったろう  
か。みなさんのご意見も今後紙面に反映させていければ  
と思う。

(大塚郁子)

■発行日  
2004年10月5日  
■編集人  
秋田光彦  
■スタッフ  
池野亮、柳澤尚樹、大塚郁子  
■発行所  
應典院寺町倶楽部  
〒543-0076  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
TEL 06-6771-7641  
FAX 06-6770-3147